

うって行くわ」

そこから乗せてもらって、童宮へ連れて行って、

毎日「ちそうを呼ばれたら名残惜しいけど、帰る

りや舞で、とつてももて

へ乗りなさい」。「そうんまり長いことよばれたでない」って、

知らんけん、乗せてもらきたけん、もう帰らして村へもどつてみたところ

てもらつけん」と言つた

友だちはおらんし、村は

すっかり変わつてしまつて、知つた人間は一人も

おらんやになつてしまつて、それから途方に

らんし様子は変わつてしまつて。

はやつとしちよつて、

海底に3日いて300年経過

「あらすじ」としてあり、遠藤さんの語り分量が連載のスタイルに収まったので、ほぼ語りたままの長さにして。 関敬吾『日本昔話大成』では本格昔話「異郷」の「浦島太郎」として次のようになっている。

「その玉手箱のふたを開けるでない」って言われたことは忘れて、玉手箱のふたあけたら、白い煙がぼーっと立ち上がった

たそつで、そげしたらもういっぺんに白髪のおじいさんになつてしまつて。 1、ある男が亀(魚)を助ける。亀に迎えられる。 2、海底の姫から宝物

3、(a) 聴耳によつて(病気の原因を知り)万能薬、殿様の病気を治して金をもらう。(b) 玉手箱をあけると白髪のもう浦島太郎は「こげ爺になる(海底に3日いたのが300年を経過)たの

300年ほど童宮さんで、みんなにちそうに

あつたり、踊り見たりして金

ら、自分の一生はもうこれぎりだ」と言われたぞ (水曜日に掲載)

イラスト・福本隆男



浦島太郎

(西伯郡伯耆町溝口)

語り手 遠藤たいさん (明治32年生まれ) 昭和57年1月7日収録

浦島太郎が海辺へ魚釣りに出たら、子どもが大人数して亀をいじめておつたそつです。浦島太郎が「その亀を自分に買わしてこいえ」と言つて、子どもからその亀を買つて、そげして放してやつたそつです。

そげしたら、明るる年だえら、3年目だえに亀が来て、浦島太郎は釣りが好きなもんだけん、いつも海辺へそげしに行きとつたら、その大きな亀が来て「子どもがたいへんお世話になつて、ご恩返しに童宮へ連れて行つ